

五十里家

孤独に咲く花

体験版用

お題「人妻」 枝湮菰



十五歳で小さな命を身籠もった。望まれない番。相手は責任も取らずに僕から離れた。

中学を卒業して家賃二万のワンルームで過ごす毎日。子どもを身籠もったのにセックスなんてできるのか、でもそういうのを好む α や β もいるらしく、どうにかお金を稼ぐことができた。

出産はどこですればいいのか、路頭に迷っていると一人の男が現われとある店に連れ込まれた。

「じゃあ栗山凜音さん、私の店で働く代わりにあなたの全てをこちらにお任せください」

そう言われ出産した小さな男の子。腕の中で小さく眠り僕の大切なものになった。

それから七年後、小学生になった弓弦^{ゆづる}はお母さん想いの少年になっていた。

「お母さん、行つてきます！」

「うん、行つてらっしゃい」

弓弦を見送り僕も仕事へと出る。毎月のノルマは五十人と言われている。一人あたり一万だとして五十人だとすると五十万稼げる計算になるそこから少し引かれ三十八万が手元に残る。ここから学費と生活費などを引いて手元に残るのは十万だった。だからといってオメガ税を払えるわけでもない、食費にあてるとなると本当はもう少し稼がないと思うがもう体はボロボロだ、ゆつくりしたいなんて考える日々。

「お疲れさまです」

お店に入り支度をした。身を清め時間になったら部屋に入り相手をする。

僕は番がいるが、行方不明というのもあり人妻のジャンルとして店にいるた

めそういうのを目的に来る男が多い。

チリリンと合図が鳴りドアを開けた。薄い肌着を身に纏い腕を首にかけ唇を重ね、体を重ねた。一時間という短い時間だが目一杯使うもの、話しをして語るだけの者、いろんなお客がいる。だがただ一人紳士で僕のことを考え接してくれる人がいた。

西様、さすがは α 、美しくかつこいい。見惚れてしまうほどに。

「こんにちは、凜音くん」

優しく名前を呼んでくれるのもきゅん……としてしまう。

「はい、こんにちは、今日もありがとうございます」

「君の予約はとれない、だからこうして君を抱けると思うと私は嬉しいよ」
そう言ってくれるだけでも幸せなことだ。

「あんあんんっんああ……そんな奥っ」

「気持ちいいかな？ 私ので、満たされている姿を見るとすごく嬉しいよ」

ぐぷと根元までみっちり入りキスをされ抱いてくれる。

四つん這いでリズムよく責められる。

「あんあんっ……」

シートを握りしめ、これじゃあダメなんだ。そう自分に問いかけ行為が終わると優しい口づけと耳元で囁かれる言葉。

「君を番にしたい」

「また、ご冗談を僕にはすでに番がいます」

目の前から消えてしまった番相手に僕は何を思っているのか。事故で番になったαに何を思っているのか。そう考えただけで胸が押し潰されそうだ。この手を取りたい、僕と弓弦を助けてほしい。西様がほしい。

「どうした？」

「いえ、なんでもありません」

ネオンの光の部屋でお会計を済ませ立ち去る背中を見つめながら次の支度

へと足を向けた。

シャワーを浴び、体を温めてチリリンと合図が鳴りドアを開けた。

「ふうー」

「おつかれ、ほれ」

「あ、ありがとうございます」

この店の社長に缶コーヒーを渡された。

「うわぁ、苦め」

「お前、甘党だったか？」

「お腹のためにですよ」

「ふーん、それより半月で二十八人目、順調そうじゃん」

「そうですね、予約がとれないと言われたのでありがたいことです」

「人妻っていいよな、まあお前の場合は相手分らないんだっけ」

「……嫌味ですか」

「いや、俺がまた抱いてやろうか？」
社長にそう言われるも顔を背けた。

「カウントしていいなら」

「あーあーつまらねえ、可愛くねえな」

「別に……」

「だいたい二十二歳で七歳のカギがいますってだけで結構すごいことだからな」

事故で孕んだとしても弓弦をおろそうなんて考えはなかった。僕がなんとかすればきつと育てられると思っていたから。

でも産む前にいろいろと大変なことがあったからこうして社長と出会わなければ今の家で一人、出産していたかもしれない。そう思うと怖かった。

「じゃあ今日の仕事は終わったので失礼します」

「んーお疲れさま、気をつけて帰れよ」

帰り際にスーパーに寄った、しかし残金を見ていると買える物が少ない。

物価高の日本は僕たちΩを苦しめていた。

誰にも頼らずよくここまで生きてきたなとしみじみ思う。

身寄りがなく、中学までは施設で暮らせたけど番という罰をおかし追放された僕。子どもを育てるなんて考えもつたらいけなかったのかもしれない。

「お母さん!!」

足元に来たのは学校帰りの弓弦。

「おかえり、弓弦、今日はこっちの道にいたんだね」

「うん」

違う、弓弦を否定したくない。この子は何も悪くないんだ、だから僕が守ってみせる。

手を繋いで帰る日々に憧れていた僕は手を伸ばしていた。それに気づいた弓弦は楽しそうに握ってきた。

「お母さん」

その言葉に僕は思いが溢れそうになる。弓弦を育てないと、僕なんかよりも弓弦を。

家に着きご飯の用意をした。

「今日はうどんなの！」

「そうだよ」

一人前のうどんを用意し弓弦に渡した。

「お母さんは食べないの？」

「ふふっ、お母さんには特別な能力があって食べなくても平気なんだよ」

「すごい！ 僕にもそれ備わってる？」

キラキラした想いを僕は壊していく。

「どうだろ、お母さんだけの特別な能力だからね」

「わー！ お母さん、すごい」

いつまで騙せるかは分からない。でも弓弦が大きく丈夫に育ってほしいから。

その夜、眠れなかった。お腹が空いてというのもあるが雨音が激しくこのアパートは壊れるのではないかと心配になってしまう。畳部屋の一式布団に包まりながら弓弦を引き寄せ眠りにつく。

本当にこんな生活続けてもいいものなのか。そう不安になるが弓弦を元気に育てなきゃ……。

毎日を繰り返していた日、突然の訪問があった。

「初めまして、私こういう者です」

アパートに来たのはスーツがよく似合う男だった。名刺を受け取り、名前を確認するとゾワツと血の気が引いた。見覚えのある名前だったからだ。

「栗山凜音さん、あなたには主のところまでご同行を願いたい」

「……拒否をすれば？」

静かに問うと

「息子さん、弓弦くんでしたか、あなたの元に戻れなくしてもいいのですよ」
ひゅっと喉がしまった。

「分かりました、バイト先に電話するのでお待ちください」

「いえ、それは必要ありません、こちらで手を打っておきましたので」

確かに連絡が来ていた。『今日は店に来なくていい、事情を後で聞かせてとあった』

アパートの前に止められていた高級車に乗り知らない地へと向かった。

「こちらでお待ちください」

都内の高いビルの中、その応接間で待っていると数分もしないうちに知
っている顔が目の前にいた。

「やあ、ようやく見つけられたね、凜音」

ビリッと何かを感じるのは間違えない、たった一人の番だということ。

「はあ……はあ……なんで……」

「なんでって？ 中学を卒業して消えた俺の番相手……あの時は悪かったね、父に秘密で君を犯し番にしまった、それにあの時身籠もってしまったなんて驚きすぎたよ、しかも産んでいるなんて特にね」

「最低」

「ふん、五十里^{いかり}家に Ω は必要ない。子であろうと成人であろうと、お前には俺の α の耐性がそして弓弦には俺の血が流れている、カスみたいな存在でも意味は分かるよな」

「……どうしてそんな酷いことを考えられるのですか」

「なんでって簡単だよ、俺は α だから、お前みたいな Ω と一緒にするな」
「それでもあなたは僕を犯し番にした……んぐっ」

急に腕が伸びてきて口元を抑え込まれる。

「あれは事故だ、でももし弓弦が α であればお前の処分も考えてやってもいい」

「……」

「バース性診断は小学四年からだったよな、もし α であれば弓弦の幸せは保証しよう、でも β 、 Ω の場合は分かるよな」

ドクン。嫌だ。どうしてこうなったのか、僕が過ちを犯したから？ 違う。僕は被害者だ。

「お前、俺の存在を嗅ぎつけてモアにでもなったか？」

「はぁ……はぁ……くっ……」

「忌々しい Ω だ、でもちようどいい久々に犯してやるよ、体の隅まで俺のを注いで満たしてやる」

「やだ、やめろ」

抵抗するも抑え込まれ乳首を摘ままれる。

「ふん、昔を思い出すな、いじめられていたΩの結末は死か番か？　だつたか、たまんねえな、久々だし手加減してやろうと思ったが……」
指が中に入ってきた。

「いっ……」

「！？　お前体でも売っているのか、すんなり指を咥えこむぞ」

「……」

「これなら慣らさなくても入っていくな」

興奮したαの性器はみるみる体の奥深くまで入ってしまった。久々に感じる番の性器に体はおかしく反応してしまう。

「あっああっ……ひぐっ……ひもちいいいい」

「へ、Ωに飲み込まれたか、こういうところは可愛いと思うが五十里家にいれば辛くなるのはお前だ」

薄らと聞こえるその言葉の余韻に自我が壊されていく。

「はあ……はあ……はああああ」

激しく打ち付けられるのもセックスでこんなに気持ちいいと感じたのはあの時以来だ。やはり僕の番なのだと分からせられる。

頭の奥深くまで満たされる、この感じに僕は必死にしがみついていた。離れたくない。

「あうあうあう」

奥を何度も突かれ喘ぎ声が漏れてしまう。

「はっこれだからモア化したΩは。いいか、ここに俺の精液たんまり注いでやるからな」

「はあ……はあ……ああっんああほしい」

耳元で囁くと子宮口に入り精液を放出された。

「はあ……はあ……んんんんっ」

中出しした後も定着されるように性器を抜かれることなくドクドクと脈打

っていた。

僕も僕でイっていた。嫌いになったはずなのに目の前の番相手に何度も抱かれ傍にいてほしいなどと思ってしまうなんて。傲慢なのかな。でもこれがあるべき姿ではないのか。

「はあ……はあ……」

「んじゃあ西^{にし}後頼むなっ」

「はい」

ドロっと漏れるのは番の精液。僕は一步も動けない、体を動かすのもキツイ。いつも会計まで同行してお見送りまでしているのに、モア中のセックスだったからなのか薄らと見える景色に見たことがあるような人影が、まさかそんなはずはない。

「目を隠させて頂きます」

そう言われ黒い布がかけられ抱き上げられた。こんな優しい α と番になれたら僕はきつと幸せだったのかもしれない。逃げられない重い足枷。弓弦を守らないといけない気持ち。僕は僕を苦しめていく。

それから弓弦は小学四年になりバース性診断が行われた。

結果が待ち遠しいなんて久々な感覚だ。僕は Ω と診断されたその日に親に捨てられ施設に入ったからあまりいい思い出はない。 Ω というだけで捨てるなんておかしいな親だったのかもしれない。

「お母さん！ ただいま」

「おかえり」

「ねえ見て！」

「弓弦、その前にランドセル置いて、手洗いうがいをしてきなさい」

「はい！」

慌ただしく帰ってきた弓弦を落ち着かせていた。きつと結果がよかったの

かもしれない。

弓弦には話しをしていた。バース性診断で α だったら良いことが起こるということ。

「ねえ見てこれ、これのことだよね」

「うん」

弓弦は α だ。僕は涙を流していた。

「お母さん？ どうしたの」

「良かったね、良かったね」

そう優しく弦き抱き寄せた。幸せになれる。

五十里家に電話をし、すぐに迎えが来た。土曜日の夕方弓弦の支度を終えたがボロボロな服しか持っていなかったためいつもの小学校に行くような格好になってしまった。

「お母さんこれからどこ行くの？」

「うーん」

お父さんは昔死んだって話しにしまっているからこの場合だと

「えっと親戚のご家族のパーティーに招待されたんだ、楽しみだね」

「すごい！ 僕パーティーに行けるんだ」

「うん」

以前迎えに来た男、屋号やじょうさんと共に五十里家に向かった。

「すごい！！ ふかふかの車だ！」

「弓弦、お行儀よくしてね」

「あ、ごめんなさい」

それでも弓弦は見たことがないキラキラな世界に車窓に貼り付いていた。

都内につくと高級ホテルのエントランスに入る手前、控え室で弓弦は着替えさせられた。

「うわぁー見て蝶ネクタイだよ！　これなら犯人捕まえられるね！」

「あはは、そうだね、とても似合っているよ」

これから弓弦はこういう世界で生きる。

「凜音様はこちらを」

一時弓弦と別れ着替えをしたが……これは明らかに女もの。

「あの、どういふつもりですか」

「あなたをお守りするための必要なものですよ」

と言われたがそもそも今日の主役は弓弦であって僕では……！！？

急に腕

が引かれ暗闇の部屋に連れ込まれた。

「あれ？　お母さんは？」

「弓弦様、しばらくお母様とは別行動になります、行きましたよ」

ドアが締めまり、弓弦が見えなくなった。これはもしかして。

「これが五十里家の異物……Ωだ」

ゾッと感じすぐに服を脱がされた。露わになった乳首に息がかかり吸われ、下半身には性器が挿入された。

「いっ……」

蠟燭の明かりだけの部屋で男たちは入れ替わり僕を犯していた。

「あんんぐっ……はぁ……はぁ……」

「俺の性器を咥えろ」

「いや、俺のだ」

滅茶苦茶に抱かれおかしくなりそうだ。それにこの香りは……。

パンパンと響き渡る肌をぶつける音、鳴り止まないイヤらしい音。

注がれる精液に抵抗できず飲み込んでしまう。いつ終わるのかも分からない行為に身が削れていく。

助けて……ドアが開き明るい廊下に手を伸ばすが閉められまた孤独になる。

口いっぱい性器を咥えて零したら掃除させられる。根元まで入って奥突

かれながら喉奥にも突きささる。まるで串焼きになったように……。

「んぐっ……」

気持ち悪くても終わらない。何より α の命令には抗えない。

「おい、こいつ声色代わったぞ、可愛いなっ」

「やっぱ α 様のは特別だからだろうね」

「ひぐっ……あっやああっはあんはあ……はあ……あるふあ」

「子宮突かれるの好きだろ、いっぱいメスイキできたら解放してあげなくもないよ」

耳元でそう囁かれ頭の芯まで麻痺させられている。その声だけでイってしまふ。嫌いな体。

「あんあんっひぐっ……ぐっ」

力なくされるがままに何人も啜えた。

解放され、また誰かの腕の中にいた。そして呟くように男は言葉を漏らし

た。

「あー私だけのものになればいいのに」

でも答えるなんてことはできずホテルの一室に寝かされた。綺麗に体は洗われ隣で眠っていたのは弓弦だった。五十里家の人間と何を話したのだろうか。僕の元からきつと弓弦はいなくなってしまう。そんなの嫌だ。

ぎゅっと抱き寄せ泣いていると声がした。

「あれ、お母さん？」

「ごめん、起こしちゃったね」

「なんかね、いっぱい買ってくれたんだ、友達と遊べるスマホとかおもちゃとかいっぱい欲しいのあって、でも我慢しないと言って言ったら全部買ってあげるって言われたんだ」

「そっか、じゃあありがとうってちゃんと言わないとね」

「うん、お母さんは何か買ってもらった？」

……。やはり弓弦の世界に僕は必要ない。

「お母さんに会えたの僕は嬉しいよ」

「え？」

そう言っただけでまた弓弦は眠ってしまった。布団を被せ「おやすみ」と伝えた。朝目が覚めると弓弦は起きていてこちらをじーつと見ていた。

「あ！ お母さん起きた！ おはよう」

「おはよう、弓弦……」

弓弦がもう着替えている、僕は何時まで寝て、ズキンと体が痛んだ。

「あのね、五十里のお兄ちゃんが朝ご飯用意してくれたんだ、食べよう！」

「五十里のお兄ちゃん？」

そこにいたのは五十里涼真^{りょうま}だった。僕の番相手。

「なんで」

「朝食一緒にどうだ」

「お母さん、すごいんだよ、シェフが来てて、なんでも作ってくれるんだよ」
立ち上がろうとしたがガクリと膝を床についた。

「これは困った昨日の夜はお盛んだったようだな」

「おさかん？」

「やめてください、弓弦によくない」

「ふん、どうだろうな、そのうち弓弦に襲われるんじゃないか」

「……そんなこと弓弦はしません」

「お母さん？」

弓弦が困っていたが屋号さんの手を借りて席に座れることに。

しかし涼真が何を考えているなんて僕には分からない。昨日は弓弦と何を話したのか、僕のことも話したのではないか。

お前の母親は体を売っている、そういうのを水商売というんだぞ。

「おええっ……」

「お母さん大丈夫？」

「ひゅーひゅー……大丈夫、ごめん」

「まったく困ったな、それじゃ母親失格だ」

涼真は立ち上がりこちらに来ていた。手をあげ Ω の僕をしつけるのだろうな。子どもが目の前にいたところでやはりやることは α なんだ。

「ダメ！ お母さんいじめたらダメ！」

「ほお、いいな。弓弦、お前のお母さんはいじめないよ、なんたって俺の Ω なのだからな」

「???」

「屋号、片付けておけ、その後二人をアパートに戻せ」

「かしこまりました」

今、アパートに戻せて言ったよね、じゃあまだ弓弦と暮らせるんだ。

あつという間に月日は流れ高校生になった弓弦はもうお母さんと呼ぶことはなく母さんと呼ぶ日々が続いていた。

奨学入学はできたものの消費税率が十%から二十%になってしまったこの世の中で僕はどうお金をまわしていけばいいのか頭を抱えていた。

それにこんな狭いワンルームじゃ弓弦は可哀想だ。もう少し稼げれば。

体験版はここまでになります。この後まだまだ凜音に襲いかかる恐怖を体験頂ければなと思うのと弓弦の気持ちとかも一緒に載せています。果たして凜音は幸せになれるのか……。